



Veritas No.13(2001.2.21)

目次 (敬称略)

<大学の中の本の夢・図書館の夢>

濱下昌宏

<図書館と私>

William Marling 黎 珂 Kim Nayeon

<図書館探索>

川島智生

<大学図書館の一年>

田中晶子

無断転載を禁ず

<大学の中の本の夢・図書館の夢>

濱下昌宏 図書館長 総合文化学科教授

昨年12月6日に大学基準協会の相互評価委員会委員による本学への実地視察がなされたが、質問事項として「図書館の実態、収集方針、蔵書内容について」というものがあった。大学図書館自体が、学生たちの読書離れ、図書の電子化、図書館の情報センター化、などによって過渡期（視点を変えれば危機）であるという認識を委員の皆さんがお持ちのことに、たいへん意を強くした。

大学が大学の名に値するものであり続けるために、図書館もまた重要な役割を課せられている。私自身の学生時代を省みても、学生にとって、図書館は師友との煩瑣な人間関係から一時避難を可能にするうるおいの場、憩いの場、くつろぎの場、そしてむろん、未知の著者による名著や浩瀚な研究書に出会って励まされる場所である。

本学では教員の業績が図書館の一室の棚に並べられる、というより、さらされる。その仕事ぶり、実力のほどが同僚と学生に読まれてしまう。よい仕事を残さねば、とあらためて身が引き締まる、という仕組みである。

読書とは、ただの識字とはちがう。緊張と集中とが要求される。書物もまた、継続した研究の時間と集中した思索の成果のはずである。だから、本が並び、読書にふける学生のいる図書館の中に流れる空気と時間は、学内の他の場所とは異質であり、密度が違う。図書館は“大学の魂”でありうるのは、そうした意味ゆえであろう。本学の図書館もそうあり続けて欲しい。

<図書館と私>

William Marling Bryant Drake Professor (英文学科客員教授)

“Browsing KC”

Among my valuable experiences this year, browsing among the books at the library has been unusually important. Unlike many libraries, the Kobe College Library seems to foster serendipity. This word is an old but extremely useful English coinage, meaning “to discover by chance, to coincide fruitfully.” One always hopes for serendipity, not only because it makes work go faster, but also because it gives one the feeling of leading a charmed life.

In the K.C. library I had at least a dozen serendipitous moments. I would be looking for something on Scott Fitzgerald for a class and come across something on globalism, which I was writing about. I picked up a volume of short stories by Kobo Abe in English, then discovered that he had been influenced by Edogawa Rampo, whom my graduate students were working on. Just today, browsing among the new books for something on Poe, I picked up Ritalin Nation by Richard DeGrandpre - it seems uncannily to have anticipated many thoughts I have had recently.

I believe that a good library fosters serendipity. Something about the display of new titles, the arrangement of old ones, the proximity of books in plausibly related fields of endeavor -- maybe there is a feng shui in library planning that needs to be studied. I'm thankful to the library and its staff - who were immensely helpful - for a stimulating year.

黎 珂 総合文化学科 研修教員

「図書館の思い出」

小さいときからずっと図書館のお世話になっていました。通っていた小学校に、図書室があって、貸し出しはしていませんが、放課後だれもが自由に閲覧できました。当時、学生の持参した本と間違えないように、皆が入る前に、玄関のベンチの上にカバンを置くように要求されていました。それが原因で、カバンなどをなくしたという子が結構いました。自分も、プレゼントにもらった筆箱を盗られたりしましたが、毎日のようにそこに入り、本を読みあさることをやめられませんでした。おかげで、物事に対する好奇心が高められ、知識の幅と量が増え、それからずっと仲間たちの中でリーダーとされていました。

中学校と高校時代には、受験勉強のため担任の先生がたのご配慮でなかなか学校の一般教養向けの図書館に入れてもらえませんでした。その代わりに、母の勤め先の病院で、労組の図書館の係りの方と仲良くなって、よく本を借り出して勉強の合間にコソコソむさぼり読んでいました。当時よく読んだ本はほとんど「レ・ミゼラブル」のような世界的名作で、自分の人生観に大きく影響を与えてくれました。その時、フランスのメリメやイギリスのブロンテ姉妹の大作に読

みふけり、より深く外国のことを知ろうと外国語にはげむ決意をしたことは、今もはっきり憶えています。

しかし、大学に入り、勉強が忙しくなった上、物心も目覚め、あちこち手を出してしまいましたが、結局無駄に終わり、せっかく初めての図書館らしい図書館ともご無沙汰になりました。四年目になると、卒論作成と大学院入試のため、ひさびさに図書館に通い始め、山積みの専門書の中で、ふたたび自信と尊厳を取り戻すことができました。その後も大学の教育活動の中で、図書館通いの読書生活は自分を支えてくれ、自分を向上させてくれました。

運良く、93年に、念願の神戸女学院大学で研修することになり、学内の図書館は自分にとって欠かせない存在となりました。教養の補充と授業用テキストの編集のため、毎日図書館に入ることが定番のようになりました。今でも図書館の前を通るだけで、七年前の自分の影がまだそのステンドグラスに残っているかと思わず二階のあの窓のほうへ目を向けてしまいます。

今回は中国語担当の内容が異なり、研究用図書費が支給されることもあって、久しぶりの図書館とも疎遠になりがちでしたが、何回も難しい内容を半信半疑の気持ちで図書館にかけ込み、調べてみたら、驚くほどによく見つけることができ、その場で歓声を揚げそうになり嬉しかったのです。今や近くに図書館さえあれば、自分が千軍万馬にバックアップされている感があって、勇ましくてたまらないぐらいです。

時代が変わり、図書館でもインターネットが入り、検索から閲覧に至るまで昔と比べられないほど便利になったことは言うまでもありませんが、私個人としては、どちらかという、本棚から好きそうな本を探りまくった末、重量感のある本を手を抱え、紙と墨の香りを嗅ぎながらページをめくることにこだわる保守派であり、この点、古風漂う閑静な神戸女学院大学の図書館での読書は、自分にとっては夢のような環境で、心身統一のできる絶好の場にほかなりません。

思うに、図書館は、読者に莫大な夢や智恵を与えてくれる以上に、科学や歴史の学問を伝え、一方時代の行方を先に読み取り、その時代を生きる人々をその場で力強く助成することも使命の一部と言えるでしょう。今日という新たな21世紀において、さまざまな世界的危機で窮地に立たされた人類の唯一の救い道であるグローバル化が進むなか、図書館は各民族、各地域における異文化の紹介と研究という人文科学の分野においても、蔵書が質量ともに充実していることは切実に必要ではないかと思えます。読者は読書を通して、自民族の反省、他民族への理解、ひいては人種、国籍を超えた人間性や世界観に到達できるでしょう。20世紀の地域紛争を見れば、民族間の隔たりがいかに人類の未来を脅かしているかは目に余ります。それを少しでもなくしようと、民族間の理解の掛け橋になるように、私は図書館に夢を託して、人類の将来を図書館にかけていたいと思うのです。

Kim Nayeon (金娜延) 梨花女子大學校 大學院 美術史 (大学院文学研究科留学生)

“My Impression of Kobe College Library”

My first impression of Kobe College library was that it was really nice and clean. Moreover, I was impressed with the school's large collection of illustrated books(大形本) despite the fact that there is no Art History Department within the University.

I also thought that the library was impressive for the following two reasons. First, I was surprised that the students were not penalized much for overdue books. For example, in Ewha, the students must pay a certain amount of money for each day the book is overdue. In the case of Kobe College the only penalty is that the student is unable to borrow books on the day the book is returned. How generous! Secondly, the librarian stamps the due date on each book for the student! Back in my school, the students have to stamp the due date by themselves. How kind!

Two other facts about the library also really surprised me. First, it was regretful that the library closed so early and also that it closed on the weekends! Back in Ewha, the library is open 24hours a day, including the weekends. Second, I was rather disappointed that the library had no mini-snack-shop! I was so used to going to the library snack-shop back in Ewha for coffee break that I found it somewhat inconvenient and sorry that there was no such facility here.

All these impressions of the library make up my beautiful memory of Kobe College which I will never forget! Many of the good and impressive thoughts of the library will be added to the pile of cherisable memories of Kobe College that I will take back home. I will reminisce my days here with joy and happiness.

<図書館探索>

川島智生 建築史家

「神戸女学院大学 図書館—その建築史的意味—」



図書館本館閲覧室

この図書館の建物はスパニッシュ・ミッションというスペインに起源をもち、アメリカ・カリフォルニアで流行したスタイルが採用されている。それはどういうものかといえば、赤茶色したスパニッシュ瓦の寄棟屋根、白いスタッコ壁、連続する 7 つのアーチの開口、玄関ポルティコのバルコニー、といった造形言語からなる。

この建築は外観の上では総務館と向かい合い、理学館、文学館とともに中庭を取り囲み、スパニッシュスタイルで統一された静謐なひとつの小宇宙を構成する。一方、内部には装飾が描かれた天井梁が特徴的な空間がある。それは 2 層吹き抜けになった閲覧室の天井の意匠にあり、大梁ばかりか小梁までに彩色が施されている。

この建物は関東大震災の衝撃がいまだ醒めない昭和初期に建設されたから、屋根が載るといふスタイルながらも、実際は鉄筋コンクリートでつくられている。このことが先年の阪神大震災での被害を少なくした原因であった。この鉄筋コンクリート造による天井の梁は一見、色彩があざやかすぎる印象を与える。だが、古代ギリシャの神殿が当初は着色されていたことを考えれば、むしろ装飾の息づいていた時代の生の姿をここにみることができる。

たしかに歴史様式の建築は築後、時間が経過していることが多いので、一見古色と結びついたイメージがあるが、実はそのようなステロタイプばかりではないという事例のひとつを形成する。付け加え、この閲覧室への階段を使ったアプローチが心憎い演出である。低く天井高さがお

とされた 1 階から、階段が廻り込むようにして上に上がっていく。そして扉をあければ、吹き抜けになった天井の高い空間に出逢うという演出である。建築家ヴォーリズの巧みな設計術のなせる技といえる。

(川島先生は来年度の「芸術学」に出講して下さる予定です。)

<大学図書館の一年>

田中晶子 大学図書館派遣職員

新世紀を迎え、2000 年度も終わろうとしている。3 月末で退職するにあたって、神戸女学院大学図書館の一年のスケジュールを振り返ってみようと思う。

大学図書館の一年は 4 月に始まる。年度の始まりが一年の始まりである。公共図書館や様々な専門図書館も同じなのだろうが、大学図書館は大学のスケジュールにあわせて運営されているので、その感がより強くある。新学年になると同時に大学図書館の一年もスタートするのである。4 月早々、グラウンドの桜並木が満開になる頃、入学式があり、オリエンテーションや授業の登録が終わると中旬から前期の授業が開始される。授業が始まると図書館の開館時間もそれに合わせて 8:30 から 18:30 までになり、新入生向けなどに図書館のガイダンスが行われる。グラウンド横の藤棚に花が咲き、5 月の連休・梅雨の時期が過ぎて 7 月に入ると前期の試験期間である。この時期になるとキャンパスのあちこちで「ナツヤスミソウ」がこぼれるように白い花を咲かせる。昔 7 月上旬から夏休みだったのでこの名があるという。この時期は図書館内も騒然としている。大勢の学生さんがレポートの準備や試験の勉強の為に来館されるからである。暑い時期でもあり、エレベーターの使用頻度が増えるので、連日のように夕方になると故障してしまう。また図書の貸出・返却が大変に多く、新館では配架しきれない図書を載せたブックトラックが掲示板の前に並んでいる。スタッフは「腰痛に注意」の時期であると思う。

7 月の末に試験が終わると、夏休みである。夏休みの間は、開館時間が 9:00 から 16:00 までになる。この時期は来館者数も少なく、図書の移動や蔵書整理など、授業の開講期間中には中々できない様々な作業が集中して行われる。この頃から卒論用の資料収集の為に、相互利用の依頼が多くなってくる。

お盆休みを挟んで 9 月末までが夏休みであるが、老朽化の為に、この間に一度は冷房が故障する。涼しい図書館を期待してやってきた人は、そういう日にあたると不運だと思う。

9 月末、ようやく涼しくなってくると後期授業の登録がある。図書館の開館時間は 8:30 から 16:30 までになる。

10 月から後期授業が始まり、図書館の開館時間が授業に合わせて再び 8:30 から 18:30 までになる。なお、10 月 12 日は創立記念日なので大学図書館も休館である。

11 月、文化の日(3 日)の前後は大学祭である。紅葉の美しい季節だ。大学祭は二日間行われるが、どちらかが平日の場合図書館は 8:30 から 16:30 まで開館している。土日祝日は休館である。また宗教強調週間には礼拝時間が長くなる。通常もそうであるが、学院の方針で礼拝時間中は図書館カウンターでの業務はできないことになっている。現在は館内での閲覧は自由であるが、以前は、礼拝時間中、利用者全員退出、だったそうである。

12 月はアドベントの季節である。講堂にはリースが飾られ、学院中がクリスマスの雰囲気に含まれる。図書館内にもポインセチアの鉢が置かれ、大学が最も盛り上がり美しい季節を迎える。またこの頃、図書館が再び混雑し始める。卒業論文や修士論文の準備の為に利用が増えるからである。相互利用係の仕事は、他大学への依頼も、逆に他大学からの受付もこの時期が最も多いと思われる。

クリスマス礼拝が終わると冬休みになる。年が明けて松の内が過ぎるとすぐに再び授業である。そして後期の試験期間である。また 1 月は各学科卒業論文の締切がある。大学図書館が最も混雑する時期である。

そしてそれが終わり、春休みに入るとすぐ、1 月末から 2 月初めにかけて入試が行われる。春休みに入ると開館時間は 8:30 から 16:30 までになる。入試の日は休館である。この清冽な季節に中庭の山茶花や椿がキャンパスを彩る。

春休みは大学にとっても、大学図書館にとっても一年の終わりの季節である。この時期も夏休みと同じように図書の移動作業や蔵書整理を集中して行う。3 月の下旬には、蔵書点検の為に 10 日間ほど休館する。

白木蓮の花が咲き、3 月下旬、卒業式である。多くの人が新しい世界に旅立って行く。別れの季節だ。図書館の職場でも異動する人あり、退職する人あり、である。

かく言う私もこの 3 月で退職することになった。二年間を過ごした職場の一年間を振り返って見たが、静かでありながら緩やかな変化があったのではないかと思う。神戸女学院のキャンパスは岡田山という自然の緑に恵まれて、季節ごとに様々な彩りを加えてくれた。街中のオフィスでは味わえない心豊かな時を感じることができた。

最後に。

二年間職場を共にし、仕事を通じてお世話になった図書館スタッフの皆様に謝辞を述べつつ、筆を置きたい。仕事の経験と、二年間の思い出は、これからの私の人生にとって貴重な糧となり、力を与えるものであるに違いない。稚拙であるが、最後にこの文章を贈ろうと思う。

<編集後記>

この冬は暖冬だという長期予報を見事に裏切って寒い日々が続いている。元気一杯の学生達は後期試験も終わり、たっぷりの真っ白な雪に覆われたグレンデにその賑やかな声を響かせているかもしれない。一方、学内は立春を過ぎて一日一日明るく強くなっていく陽射しの中で、ひっそりと静まりかえっている。

一般入試が2月2～3日に行われたが、受験生の皆さんの邪魔にならないように、集中できるようにと、エアコンの音を静かにしたり様々な工夫をして試験の日を迎えるのだけれど、春の陽射しの中で幸せそうに鳴く鳥達の声だけはどうしても出来ず、オーラルテストの最中にピーッなどと大声で鳴かれたらどうしようと心配してしまう。自然に恵まれた美しいキャンパスでは美しいはずの鳥のさえずりも時には騒音?になってしまうのか・・・と変な感心をしてしまった。

卒業式という別れの時が間近に迫っているが、図書館もこの“Veritas”をWeb上で発行することにお力添えくださった濱下図書館長はじめ何人かのスタッフとこの3月をもってお別れすることになった。この後も“Veritas”を暖かく見守っていただきたいと思う。

皆様のご健康とご活躍をお祈りいたします。

< Veritas No.13 編集委員：溝口・井出・竹中 >